

50【街の散策からの気づき発見】

公園橋の河津桜

会員 K.T.

寒さが和らぎ、大落古利根川遊歩道の昼の散歩ができるようになった。2月中旬、公園橋の2つの河津桜がピンク色の花を咲かせていた。『不思議なものだ』、と思う。季節がくると、植物は花を咲かせる。昨年も楽しませてもらったが、樹は一年の年輪を刻み、花の色形は同じでも一年前とは違う新しい花だ。『一年がたったのだなあ』、と花を愛でながら思う。

河津桜は伊豆の河津町が有名だ。ネットで河津町観光協会をみると、現在、満開まで70%の状況という。河津桜の由来も掲載されている。「(前略)河津町田中の飯田勝美氏(故人)が1955年(昭和30年)頃、偶然発見した苗を植え、1966年(昭和41年)から開花が見られ、1月下旬頃から約1ヶ月にわたって咲き続けました。(中略)県有用植物園(現農業試験場南伊豆分場)は、賀茂農業改良普及所、下田林業事務所(現伊豆農林事務所)や、河津町等と、この特長ある早咲きのサクラについて調査をし、このサクラは河津町に原木があることから、1974年(昭和49年)にカワズザクラ(河津桜)と命名され、1975年(昭和50年)に河津町の木に指定されました。(後略)」、とある。この桜は昭和の時代に命名されたものだ。オオシマザクラとヒガンザクラの自然交配種と推定されている。桜の花を見ると、西行上人(1118~1190)の歌を思い出す。「願わくば花の下にて春しなん そのきさらぎのもちづきのころ(三家集)

(願うことは、桜の花が咲いているもとで春に死にたいものだ。それも、釈迦が入滅したとされている如月(2月)のもちづき(2月15日の満月)の頃に)」月と桜を愛した西行が晩年に詠んだ歌だ。西行の頃の桜は山桜になる。陰暦の如月は現在の太陽暦では2月下旬から4月上旬頃、山桜は咲いていたのであろう。

西行は享年73歳、建久5年(1190)旧暦2月15に弘川寺(大阪府河南町)で亡くなった。歌のとおり、桜の季節で満月の頃、亡くなった、と語り継がれている。西行は、望むとおりに死を迎えた人だった。西行の晩年の心境と歌を調べようと、家に戻り、現代語訳 日本の古典9『西行・山家集』井上 靖 を紐解いた。

西行は文治2年(1186)69歳のとき、平重衡の南都焼き討ちによって治承4年(1180)に焼失した東大寺再建のために、奥州の覇者、藤原秀衡へ砂金の勧進を依頼するために、奥州への旅に向かった。

年たけてまた越ゆべしと思ひきや いのちなりけり小夜の中山 (年老いて、この小夜の中山を再び越えられるとは思ってもみなかった。命があればこそなのだなあ)、西行は奥州への数ヶ月の旅から無事帰国、勧進を頼んだ秀衡は、翌年文治3年(1187)に没し、奥州藤原氏は源頼朝により、文治5年(1189)に滅亡した。西行が平泉を訪ねた後、わずか3年で奥州藤原氏は滅亡した。この年、死の1年前、弘川寺に草庵を結ぶ。「津の国の難波の春は夢なれや 芦の枯葉に風わたるなり (心ある人に見せたいと古人が詠み、わたしも歌ったあの摂津の国の難波の美しい春景色は、夢のことであったのだろうか。今再び来てみれば、芦の枯葉をざわざわと動かしている風が渡っており、何とも言えず淋しい荒涼たる冬の景色である。)

古いゆけば末なき身こそかなしけれ 片山ばたの松の風折れ (ぼつんと置かれている山畑に生えている松が風で折れているのを見ると、老いて残された人生も幾莫もない我身を思い返されて淋しいことである。)

はかなくぞ明日の命をたのみける 昨日をすぎし心ならひに (いつも明日の命をたのんでは一日一日を過ごしてきた。まるで惰性でここまで生きて来たようなもので、思えばはなかいことである。)

笠はありそのみはいかになりぬらむ あはれなりける人の行くすえ (笠はあるが、蓑笠着けていた人はどうなってしまったのであろうか。人の行末というものは哀れなものである。)、西行晩年の悟りの心境の歌を期待していたが、最晩年の4首は人の世のあわれ、生の終わりは淋しい、と詠っていた。桜から西行の故事と和歌に想いをよせ、ふと、西行の死は自然死なのだろうか、尊厳死だったのだろうか、と思った。



春陽像と河津桜



公園橋の河津桜